

地域の農業の課題解決に向け、昨年夏に広島市安佐南区伴・大塚地区の兼業農家たちで結成した「アグリ アシストとも」が、地域の田園風景を守る活動を本格的に始めた。働く人が自ら出資し、経営にも参加する「協同労働」を支援する市のモデル事業の一つ。田畑の保全や耕作放棄地の有効活用などに取り組む。(石井雄一)



公園のビオトープで土砂をかき出す「アグリ アシストとも」のメンバーたち

安佐南区「田園風景守りたい」

農業の困り事 伴・大塚の兼業農家ら わしらが解決

西本正憲代表(70)は「地域住民に寄り添い、メンバーも楽しみながら活動したい」と意気込んでいる。

今年1月には、地域課題の解決に高齢者の力を生かす狙いで市が支援する「協同労働」のモデル事業に採択された。地域住民たちからの依頼を受けて、田畑の草刈りや代かき、植木の剪定、作物の植え付けなどを有料で請け負う。遊休地を活用し、メンバーの指導で、興味のある人が共同で作物を育てる仕組みづくりも目指す。

「アグリ アシストとも」のメンバーは14人で、全員が60歳以上。住宅地の周辺に田園風景が残る地区では近年、担い手の高齢化が進む。遊休地や耕作放棄地も増えており「何とかしたい」と立ち上がった。

安佐南区伴西の「おくはたホタル公園」で8日、メンバーたち11人が、川から水を引いたビオトープの土砂のかき出しに精を出した。地元町内会などてつくるグループ「ホタルの里おくはた」の依頼を受けて作業。上垣内保之さん(72)は「活動を重ねて景観をしつかり守っていきたい」と汗を拭った。

安佐南区伴西の「おくはたホタル公園」で8日、メンバーたち11人が、川から水を引いたビオトープの土砂のかき出しに精を出した。地元町内会などてつくるグループ「ホタルの里おくはた」の依頼を受けて作業。上垣内保之さん(72)は「活動を重ねて景観をしつかり守っていきたい」と汗を拭った。